The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究 : 母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに
Author(s)	マリヤナ, ヴォイニコヴァ
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 89-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69218
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究
―母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに―

ヴォイニコヴァ　マリヤナ

1. 背景

日本語教育において、複合動詞は、学習者にとっては習得が非常に難しいものであるという印象がある。しかしこれを実証的に示した研究は本稿の筆者の知る限り、あまり多くない。日本語教育における複合動詞研究は、姫野(1999)や松田(2004)が参照されることが多いが、これらはあくまで日本語学の文脈の中で複合動詞を研究したものであり、習得についてももちろん論じてはいるが、それは決して詳細なものとは言えないし、また学習者の実態を正確には反映していないように思われる。そこで本稿ではそのような日本語学の系統とは違った方面からのアプローチを試みたい。具体的に言うと、第二言語習得研究の成果をより幅広く参照して、日本語教育に応用できるものがないか考えてみたいと思う。そして第二言語習得研究の中でも最も多くの成果が挙げられているのは英語教育研究であること、また英語における句動詞は、基礎的な動詞を他の語と組み合わせて新たな複雑な意味を持つ動詞を生成する点で、日本語における複合動詞によく似ていること、これらの二点から、英語句動詞習得研究を日本語複合動詞習得研究に応用することを試みたい。

2. 先行研究と本稿の目的

英語の句動詞と日本語の複合動詞は、いずれも、二つ以上の要素を組み合せて一つの新しい単位を作るものである。このとき作られる新しい単位の意味は、前項要素と後項要素のそれぞれの意味を、単純に組合せたものと理解できる場合もあるが、

wake up	飛び立つ
go away	読み始める

そうではなく各要素の意味だけからは予想できない場合もある。

jump in on	申し込む
put up with	落ち着く

これらのものは、学習者にとっては当然習得が困難であり、そこに英語句動詞と日本語複合動詞との類似点を見出すことができる。英語句動詞についての研究を、日本語複合動詞に応用する理由もここにあるのである。

さて、第二言語としての英語学習者の句動詞の習得についての研究として、参照すべきなのはまず飯尾(2013)である。

飯尾(2013)は、英語句動詞について、学習者と母語話者の使用頻度を比較した研究であり、また単に両者の違いを示すだけでなく、学習者の句動詞学習における傾向についても

議論しようとしている点で、本稿にとって大いに参考となるものである。この研究では、JEFLL コーパス(日本人の中学・高校生による自由英作文のコーパス)と PERC コーパス(700 万語の英語及び 22 の理系分野からなる日本人学術論文コーパス)を用い、COCA コーパス(母語話者のコーパス)と比較するという方法を用いている。この調査の結果、句動詞の使用について、日本語を母語とする学習者は英語母語話者に比べておおむね低い使用率を示すことが明らかになった。ただし一部には、母語話者とさほど変わらない使用頻度の句動詞もあり、学習・使用が比較的易しいものが存在することも示された。この研究ではさらに、高い頻度で出現する句動詞のデータが示されており、これを利用することによって句動詞習得をより効果的に行うことができるようになるという。結論として筆者は、句動詞習得を進めるためには、練習の繰り返しとより深い内容の理解が必要であるということを提言している。

飯尾(2013)の結果が本稿に示唆することの中で最も重要なのは、「句動詞の使用は一般に母語話者の方が多いという指摘が実際そうであることは明らかである」という記述である。この英語句動詞に関する言及は、日本語複合動詞にも当てはまるのではないかと考えられるからである。日本語複合動詞についても、一般に、母語話者の方が頻繁に使用すると言われることが多いし、本稿の筆者の実感としてもそのように感じている。しかしそれを計量的に比較した研究はこれまでほとんど存在していない。だが英語句動詞のより効果的な習得の出発点として、まずその使用実態を明らかにすることが、最も基本的な段階としてなくてはならないであろう。

そこで本稿では、「学習者は複合動詞をあまり使わない」という仮説を提示したい。そしてそれをコーパスを用いて数値的・客観的に証明することを目的とする。具体的な研究の方法は次節「方法」において述べるとおりである。

3. 方法

初級で学習する複合動詞について、母語話者のコーパスと学習者のコーパスで出現頻度を調査し、両者の結果を比較する。母語話者のコーパスとしては「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) を用い、学習者のコーパスとしては「日本語学習者言語コーパス」・「日本語学習者作文コーパス」・「日本語学習者縦断発話コーパス」(CJAS)を使用する。母語話者のコーパスが書き言葉コーパスであるのに対し、学習者のコーパスが書き言葉コーパス（「日本語学習者言語コーパス」・「日本語学習者作文コーパス」）と話し言葉コーパス（「日本語学習者縦断発話コーパス」）が混在している点は、やや結果に影響をもたらすかもしれない。しかし、母語話者コーパスの言語量に比べて、学習者コーパスの言語量が十分ではないため、多少の誤差はあるかもしれないが、データの量を確保することを優先した。今後、十分な言語量を持つコーパスか書き言葉・話し言葉、そして母語話者・学習者ともに増加することがあれば、改めて調査を行い、話し言葉と書き言葉との比較なども試

みることが望ましいであろう。

また、「初級で学習する」といっても、さまざまな基準があるが、本稿では、最も広く使用されている初級日本語教科書の一つ『みんなの日本語』初級で扱われているものを取り上げる。このような設定の仕方には異論もあるかもしれないが、まずは有名なもので見当をつけておくことは意味があることだと思う。また、本稿では「思い出す」のような v+v 型の複合動詞のみを対象とし、「片付ける」のような複合動詞は調査対象から除く。さらに、「(銀行での現金の)お引き出し」や「引っ越し」のような名詞形でしか導入されないものについても、調査の対象から除いている。全て今後の研究で取り扱うことにしたい。

さて、この基準で調査の対象となる語彙は、次の 8 語である。これらは、初級から導入されるものであり、初級以上の全てのレベルの学習者が習得しているはずのものであるから、母語話者と同等に習得できているとすれば、全ての学習者コーパスにおいて母語話者コーパスと同程度の使用頻度が見られるはずである。

思い出す	知り合う	取り替える	召し上がる
組み立てる	出かける	乗り換える	申し込む

ただし、この結果からだけでは、複合動詞における母語話者・学習者間で使用頻度に違いが見られたとしても、それが調査対象が複合動詞であることによるものなのか、それとも別の要因(たとえば、やや考えにくいものの、学習者はそもそも動詞の使用頻度が低いなど)によるものなのか判然としない。そこで、上の調査に加えてさらに、これらの複合動詞の前項の単純動詞も、母語話者と学習者のコーパスそれぞれで出現頻度を調べ、複合動詞の場合と比較を試みる。ただし、「組み立てる」の前項動詞「組む」および「召し上がる」の前項動詞「召す」については、初級で扱われる語彙には含まれないため、調査の対象から除く。

各コーパスの具体的な調べ方について、「思い出す」を例にして記しておく。他の調査対象語についても、基本的に同様の調査を行う。重要な点は、それぞれのコーパスで検索ソフトが異なるため、表記の違いや活用形の違いによって検索結果に等しくないところが出ないように注意することである。

中納言：

「短単位検索」において、キーで「語彙素」を選択し、「思い出す」と入力して検索する。「語彙素」検索においては、表記の違い(「思いだす」「おもいだす」「おもい出す」などなど)や活用形の違い(「思い出して」や「思い出さない」など)を無視して検索することができるので、検索結果に特別の操作を行う必要はない。「出かける」は語彙素が「出掛ける」で登録されているので、これを検索キーとする。

日本語学習者言語コーパス：

「検索単語」の欄に「思い出」「おもいだ」「おもい出」「思いだ」をそれぞれ入力して、検索する。このとき、名詞の「思い出」「おもい出」など、「思い出す」と直接関係のない

語も検索されてしまうので、それらは結果から除く。また、本稿ではこのコーパスを非母語話者のデータを収集するために用いるので、検索する際、Data of Native Speakers は対象から除く。

日本語学習者作文コーパス:

「形態素単位で検索」を選択し、「思い出す」と入力して検索する。誤用・正用については、両方を表示させるようにする。「検索オプション 1」では、対象となる領域を選択できるので、「学習者レベル」と「性別」「学習環境(収集場所基準)」「誤用クイプ」については全てを選択した。また、「品詞」は「動詞」を検索するようにしている。「検索オプション 2」でも、「主な母語」「日本語履歴」「テスト成績(文字語彙)」「テスト成績(文法)」いずれも全ての対象を検索するように設定した。

日本語学習者の縦断的発話コーパス:

「形態素単位で検索」を選択し、「思い出す」と入力して検索する。「検索オプション 1」では、対象となる領域を選択できるので、「話者」と「収集時期」については全てを選択し、また「学習者の発話のみ検索」することにし、調査者の発話は対象から除く。「検索オプション 2」では、「語彙素で検索」「完全一致」をそれぞれチェックし、品詞・意味分類についてもともに「全て」を選ぶ。また誤用・正用については、両方を表示させるようにする。

4. 結果

さて、上記の方法に基づいて収集された、各コーパスにおける複合動詞の用例数について、その結果を紹介したい。調査対象となる複合動詞は 8 語であるが、その全てについて調べた結果を表 1 として報告する。

表 1(複合動詞の用例数)

動詞	中納言	日本語学習者言語コーパス	日本語学習者作文コーパス	日本語学習者の縦断的発話コーパス	学習者コーパス合計
思い出す	9199	27	13	18	58
出かける	7314	13	4	25	42
乗り換える	668	1	0	0	1
組み立てる	818	0	0	0	0
知り合う	1303	5	0	22	27
取り替える	779	1	3	0	4
召し上がる	400	0	0	0	0
申し込む	1836	1	1	0	2

ただし、表 1 は各コーパスとの言語量を無視した用例数のみの表であるので、単純に比較することはできない。そこでこの表から言語量を参照して使用頻度を算出し、表 2 として掲げる。数値は、100 万語中に当該複合動詞が何度現れるかを示したものである。

表 2（複合動詞の使用頻度）

コーパス	中納言	日本語学習者言語コーパス	日本語学習者作文コーパス	日本語学習者の縦断的発話コーパス	学習者コーパス合計
言語量	100000000	200000	113500	800000	1113500
動詞					
思い出す	91.99	135	114.54	22.5	52.09
出かける	73.14	65	35.24	31.25	37.72
乗り換える	6.68	5	0	0	0.9
組み立てる	8.18	0	0	0	0
知り合う	13.03	25	0	27.5	24.25
取り替える	7.79	5	26.34	0	3.59
召し上がる	4	0	0	0	0
申し込む	18.36	5	8.81	0	1.8

さらに、比較のために、各コーパスにおける単純動詞の用例数と使用頻度（100 万語中に当該動詞が何度現れるか）を、それぞれ表 3・表 4 として提示する。

表 3（単純動詞の用例数）

単純動詞	中納言	日本語学習者言語コーパス	日本語学習者作文コーパス	日本語学習者の縦断的発話コーパス	学習者コーパス合計
思う	229081	1054	967	1300	3321
出る	80695	65	74	346	485
乗る	19646	55	23	26	104
知る	64503	143	165	269	577
取る	79554	100	182	181	463
申す	5629	69	1	4	74

表 4(単純動詞の使用頻度)

コーパス	中納言	日本語学習者言語コーパス	日本語学習者作文コーパス	日本語学習者の縦断的発話コーパス	学習者コーパス合計
言語量	100000000	200000	113500	800000	1113500
単純動詞					
思う	2290.81	5270	8519.82	1625	2982.49
出る	806.95	325	651.98	432.5	435.56
乗る	196.46	275	202.64	32.5	93.4
知る	645.03	715	1453.74	336.25	518.19
取る	795.54	500	1603.52	226.25	415.81
申す	56.29	345	8.81	5	66.46

表2と表4だけでは、母語話者のコーパスと学習者コーパスの違いが分かりにくいので、それだけを取り出して、母語話者コーパスにおける各複合動詞／単純動詞の出現頻度を 1 としたときの、学習者コーパスにおける同じ複合動詞／単純動詞の出現頻度を、次の表 5 として示す。

表 5(複合動詞／単純動詞の出現頻度)

複合動詞		単純動詞	
動詞	学習者コーパス合計／中納言	動詞	学習者コーパス合計／中納言
思い出す	0.57	思う	1.3
出かける	0.52	出る	0.54
乗り換える	0.13	乗る	0.48
知り合う	1.86	知る	0.8
取り替える	0.46	取る	0.52
申し込む	0.1	申す	1.18
召し上がる	0		
組み立てる	0		

5. 考察

さて、以上のような調査結果から、どのような結論を導くことができるだろうか。本研究の仮説は、「学習者は母語話者よりも複合動詞の使用頻度が低い」というものであった。調査の結果、特に表 2 を見ると、概ねそのような傾向があり、特に「乗り換える」「組み立てる」「召し上がる」「申し込む」の 4 語は、単純動詞のいずれの語に比べても母語話者/学習者間での使用頻度差が大きい。また「思い出す」「出かける」「取り替える」についても、単純動詞の場合と同じくらいの使用頻度差ではあるが、学習者の方が使用頻度が低く、仮説の予想するところに違背しない。しかし「知り合う」に関してだけは、学習者コーパスの方が母語話者コーパスよりも高い使用頻度を示しており、本研究の仮説に反するものである。ただしこれは、「日本語学習者言語コーパス」と「日本語学習者の縦断的発話コーパス」における話題の選択がもたらしたものであろう。特に日本語学習者の縦断的発話コーパスでは作文の課題となったテーマは「小・中学校の先生の思い出」「留学 1 年を振り返って」「私の日本人の友達」「私の学校生活」「日本人について」「休日の過ごし方」「日本の衣食住について」「日本での 3 年間を振り返って」というものであり、特に「小・中学校の先生の思い出」や「留学 1 年を振り返って」、「私の日本人の友達」、「日本人について」、「日本での 3 年間を振り返って」などでは、必然的に「知り合う」という複合動詞が使われやすいのではないだろうか。母語話者コーパスである「現代日本語書き言葉均衡コーパス」にはこのような偏りはないため、使用頻度にいわば逆転現象が生じてしまったのだと思われる。この「知り合う」についての結果を除いて考えれば、日本語の複合動詞においても、先行研究における英語句動詞と同様、学習者の使用頻度は母語話者に比して低いと結論づけることができるであろう。

もうひとつ指摘しておきたいことは、複合動詞の結果のほうが、動詞ごとの頻度の差が大きいということである。頻度の比率を表した数値を見ると、0.0 あるいは 0.1 から、1.86 という数値まである。これに対して単純動詞の方は少なくとも 0.48 から多くて 1.30 の範囲に収まっている。

これらの調査対象語彙は、いずれも初級段階の語彙であり、コーパスのデータを提供した学習者はみな習得しているはずである。しかし、単純動詞が一つのグループになっているように見えるのに対し、複合動詞はグループをなしていないのである。この結果は、どのような学習状況を示唆しているのであろうか。

英語教育研究の結果をヒントとして使うことができる。英語における句動詞は、複雑な意味を持つ動詞であり、二語の組み合わせであるという点で、日本語における複合動詞によく似ているところがある。したがって、英語句動詞と日本語複合動詞の習得にも同様な傾向があると予想できる。例えば Waibel(2007)は、ドイツ語母語話者特有の現象として、元々ゲルマン語由来である句動詞の使用頻度が英語母語話者よりも高くなることを指摘している。ゲルマン語を母語とする英語学習者は母語由来の句動詞を体系的に把握し、習得

しているというような解釈が可能である。その場合には、英語学習者の句動詞使用頻度が母語話者よりも高くなる事例が認められるのである。

このことを敷延して考えれば、日本語複合動詞における語ごとの頻度のばらつきは、学習者が各語を体系的にではなく個別的に習得していることを示しているのではないだろうか。単純動詞「思う」「出る」「乗る」「知る」「取る」「申す」などは典型的な基礎語彙であって、それらは体系的に習得される。これに対して復合動詞は少なくとも典型的には基礎語彙ではなく(使用頻度の絶対数も単純動詞に比べて大きく下がる)、それゆえ個別に習得されているのではないだろうか。

6. 結論・今後の課題

英語句動詞においては、学習者は意味的に複雑な句動詞を使うことを回避し単純動詞を選択する傾向があることが先行研究で明らかになっている。日本語複合動詞においても本研究の結果から意味的に複雑な複合動飼を使うことが回避されていることが明らかになった。このことを計量的数値的に示すことができたことが、本稿の意義であると主張したい。

ところで、それでは学習者は、複合動詞で表されるべき内容をどのような表現を用いて書いているのだろうか。これは今のところ単なる予想に過ぎないが、その言わば代用として単純動詞あるいは漢語などを使う傾向があるのではないかと思われる。今後コーパスを使って漢語サ変動詞の使用頻度の比較を行うことを計画しており、その結果からこの予想が正しいか否か検討することかできるであろう。

【附記】

本論文の学習名のデータの収集には、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『CJAS』(および検索システム)・東京大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)」の研究成果「日本語学習者言語コーパス」・科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」による研究成果「日本語学習作文コーパス」を利用した。

本論文の母語話者のデータの収集には、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(および検索システム)を利用した。

【参考文献】

飯尾豊(2013)「コーパスを用いた日本人学習者の句動詞の使用に関する研究」『熊本大学社会文化研究』11、35-53.

川尻武信(1991)「句動詞の指導に関する一考察」『呉工業高等専門学校研究報告 26(2)』, 15-20.

小谷悠紀子(2003)「英語句動詞における学習上の問題を探る」『東京電機大学総合文化研究

(1)』、35-42.

佐野洋(2006)「BNC を利用した教育用英語句動詞用例集」『情報処理学会研究報告コンピュータと教育研究会報告 46』.

高橋千佳子(2009)「英語句動詞の分析と英語教育への応用」『東京純心女子大学紀要(13)』、11-26.

谷明信、堀池保昭、杉森直樹、冨田かおる(2002)「コーパスによる英語句動詞研究：応用言語学的観点から」『実技教育研究 16』、 31-37.

谷口茂謙(2007)「Take+副詞による句動詞の意味を日本人学生に認知させる英語教授法－「コア」からの発展をたどる」『常葉学園大学研究紀要外国語学部(23)』、11-45.

谷口茂謙(2008)「句動詞 get up/down の意味の認知を母語話者に近づける英語教授法」『常葉学園大学研究紀要外国語学部(24)』、49-51.

谷口茂謙(2008)「句動詞 get in/out の意味の認知を母語話者の認知に近づける英語教授法」『外国語学論集(9)』、47-77.

中川右也 (2012)「句動詞指導への示唆:認知言語学と英語教育の接点を求めて」『米子工業高等専門学校研究報告(47)』、6.

中田達也(2007)「Low-First 分散学習方式による定型表現の学習－既知語から構成される句動詞の学習における形態的精緻化の効果」『言語情報科学(5)』、 165-180.

中本麻美、横川博一(2004)「日本人英語学習者による英語句動詞習得におけるタスク・バリエーションと処理水準」「神戸大学国際コミュニケーションセンター論集 1』、 43-63.

野村芳男(1994)「英文技術教科書にみる動詞句出現頻度の一視点:フーリエ級数分野」『電子情報通信学会技術研究報告 NLC、言語理解とコミュニケーション 94(32)』、 1-8.

姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究:認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房.

吉田晴世、三根浩、佐伯林規江(2000)「句動詞 CALL ソフトによる英語コア・イメージの学習」『JACET 全国大会要綱 39』、 244-245.

Macauley, Myles (2002)「句動詞について英語教師の視点から」『名古屋女子大学紀要人文・社会編(48)』、 225-234.

Moehle, Ashlyn (2012)「out を含む英語の句動詞と「出る/出す」を後項とする日本語の複合動詞：意味的観点からみた対照的分析」『日本語・日本文化研究』22 号、135-148.

Waibel, Birgit (2007) *Phrasal verbs in learner English: a corpus-based study of German and Italian students,* Doctoral dissertation, Freiburg: Albert-Ludwigs Universität, Freiburg